

「大竹伸朗 ビル景 1978-2019」展 関連イベント

大竹伸朗アーティスト・トーク

日時 2019年4月13日(土) 14:00-15:00

場所 熊本市現代美術館 ホームギャラリー

講師 大竹伸朗 (アーティスト)



写真は5月3日のアーティスト・トークの様子

大竹伸朗 ビル景 1978-2019

会期 2019年4月13日(土) - 6月16日(日)

会場 熊本市現代美術館 ギャラリーⅠ・Ⅱ

大竹 大竹です。外の方が気持ちいい日なのに、わざわざ来ていただいてありがとうございます。いつもトークショーは行き当たりばったりで、お客さんの顔を見ながら話題を考えて、あまり決めないで話すことが多いので、話がどうなるか全然分かんないです。いきなり展覧会の話から入ると堅苦しいので、今日どうやってここへ来たかという話から始めます。すごく天気がいいんで、ぶらぶらと商店街を歩いて、奥の方にある古本屋さんに行ってきました。平凡社の『ファブリ世界名画集』っていう薄い大判の画集が一冊 100 円で売っていて、一番上にはフランス・ベーコンが置いてあった。「この全集が最初の教科書だったなあ、妙な名前というだけで『エルンスト』の巻を買ったなあ」といった頃を思い出しました。

エッセイにも書いたことがあるんですが、うちは芸術だとか文学だとかそういった文化的な素養がまったくない家庭でした。親父は 20 年ほど前に亡くなりましたが絵を描いたりなんでも自分で作ることがすごく好きな人でした。お袋は三味線で小唄を教えていました。親父もそういったことが好きで向かい合って三味線に合わせて歌っていた光景を覚えています。芸術というよりは芸事の好きな家だったんでしょうね。小学校に上がる前の記憶に残っているのは、毎週火曜日に新橋まで三味線の稽古に通っていて、そこについていった。2 時間ぐらい終わるのを待ってるんだけど、何となくその時の小唄のフレーズが未だに残っています。で、うちの親父は、ほんと色々な仕事をやっていて、最初は目黒で鞆屋、次は大田区で蕎麦屋を始めて、次に池袋へ移動してと結構都内を転々と引っ越しました。まだ小さかったんで細かい事情はよく覚えていませんが良くも悪くも「転校」による様々な思い出が残っています。僕が生まれたのは昭和 30 年（1955 年）で、まだ戦後 10 年の生まれなのですが、当時の東京の記憶に戦争の爪痕的なものがあまり残っていない。たった 10 年ほどでそこまで立て直した当時の人たちは立派だったんだなということを、30 歳を過ぎてから改めて思いましたね。小学校の時、引っ越しのせいで、池袋から電車通学してたんですが、西口は東京オリンピックが開催された昭和 39 年頃まで、都内でも最後まで闇市の名残のようなエリアがありました。結構ヤバいところ、っていうかね。そこを小学校の時に通ってたんですよ。それで、その後ネオン管を使った作品を作るようになってから、なんでネオンが好きになったのかというようなことを考えると、やっぱり思い当たるのは、池袋の風俗街みたいなところなんです。学校行く途中に歩いてたら、話とかはしなかったんですが、下着姿のお姉さんが手を振ってくれたりして。その当時、すごく不思議だったのは、ビルの上に赤いネオン管で「トルコ」って書いてあったんですよ。なんで国の名前なんだろうって謎が解けるのに、思春期までかかった。あの赤いネオン管が自分の記憶に鮮烈に残っているんですよ。



「大竹伸朗 ビル景 1978-2019」展 会場入口

昨日もご挨拶した時に少し話したんだけど、「ビル景」ってテーマで作品を描こうって決めたことは一回もないんです。「ビル」っていう1つのラインがあると気づくまでに大体20年以上かかってるんですよ。会場内の壁にも書いてあるんですけど、ビルに興味を持ったのは、1979年の9月なんですよ。なぜそうはっきり覚えているのかというと、その前の、77年と78年に初めてロンドンにいきました。帰ってきた後に、町内会の香港旅行みたいなのに欠員が出て、パスポート持ってる暇な奴はいないかって、出発前日に俺のところ知り合いから電話があって。その頃パスポート持ってる学生ってあんまりいなかったんでね。タダでいいよって言うから、行ったんですよ。で、その頃っていうのは、JALパックみたいな海外旅行・買い物ツアーが流行ってて。2泊3日香港旅行みたいなのがあったんだけど、買い物に行く所かよって、内心ちょっと馬鹿にしてたんです。ところが、香港に着いて、ビルの真上を飛行機から見たとき、やられたって思った。当時の啓徳空港は、ビルの谷間を離着陸する世界で一番難しい空港、と言われてたんです。その頃、東京は国際都市みたいなことを言われてたんだけど、香港で道歩いてたら、地元の小学生に広東語でなんか聞かれて、分かんないといきなり英語で聞き返されたりね。日常での英語のあり方というのか、やり取りの「間」になんか東京が国際都市って本当か？ってな衝撃がありました。その2泊3日がきっかけで「香港病」になっちゃったっていうかね。

その後、イラストレーションワークショップって、俺と同じ年くらいの香港の5、6人

の集団と知り合っ。当時は80年前後で、YMOが出てきた頃なんだけれども、テクノカットの中国人のおしゃれな集団というんですか？そんな連中も定期的に東京に通うモードのようなものができてきた。で、自分は絵も展覧会もやってないし、教職の免許も持ってないし、会社勤めは無理だろうし、どうしたらいいのかなと思って。「じゃあ香港に遊びに来れば？」って、渡りに船みたいな状況で、そのイラストレーションワークショップの中国人の家を転々と泊まり歩いてたんです。それで今回の展覧会場の一番最初にある「倫敦／香港」シリーズっていうのは、その当時、友達の家を借りて描いていた絵なんですよね。それが80年で、自分の初めての『倫敦／香港一九八〇』って画集が出るのがその6年後。だから今回、「ビル景」の展示をしていて、自分の記憶の中の街を歩いているようなね。絵を並べることでフラッシュバックした。その当時の日常のディテールが、設置中に見えてきた。そういう不思議な体験をしました。

その頃を振り返ると、自分はズーっと定住場所が無いっていうか。高校までは東京にいたけれども、卒業してからは北海道の別海町っていうところにある牧場に牛の世話に行ったり。当時は東京を出たくて出たくてしょうがなくて。まあ話はこんな調子で、どんどん飛んじゃいますけど、そこはご勘弁願って（笑）。その後も、高田馬場の「揚子江」って中華料理屋で、5時から11時までの皿洗いのバイトして、それで金貯めちゃあ外国行くみたいな。まあ今でいうニートの典型なんですよ。ニートって言葉を初めて聞いた時に、「わあ、俺はニートだったんだ」って思いました。ロンドンに行ったのも、全く無目的ですよ。当時はニューヨークとかアメリカ西海岸が流行ってて、俺もアメリカに行ってみてえとか思って。一回は外国に出ないとダメだなって。

話がまたちょっと戻るんだけど、そのファブリだよね。最初の古本屋の話とつながるんですけど、自分が油絵を描き出したのは中1なんですよ。さっき言ったように、自分の家は「芸事」はあったけど「芸術」「文学」といった素養がなにもないうちで、親に美術館に連れていってもらったり、そういう文化的な記憶もまったくない。けれども、なんで油絵を知ったかっていうと、「レンブラント展」がそのきっかけだったんです。上野で開催された。レンブラントって変な名前だなくらいに思って、全く観に行く気はなかったんですけど、なぜかお袋に連れられてレンブラント展に行ったわけですよ、いまだ理由は謎なんです。それで展覧会を観て、まあびっくり仰天した。なんでかっていうと、要するに「なぜ油絵でこんなに写真みたいな絵が描けるんだろう」というのがまず驚きだったんです。それで展覧会を観た後に、お袋に油絵の具のセットを買ってくれて頼んで、3000円くらいのセットを買ってくれたんです。そしたら、画材屋のオヤジが洋画家の岡鹿之助著『油絵のマティエール』っていう分厚い本も出してきて「これも読んで勉強しなさい」と、それもセットで買ったんですよ。まあ買わされたんでしょうか。その中の図版にアンリ・ルソーの絵とかが載っていて「これだったら俺の方がうまいかな、いけるかも？」とか思ってね。あれがもしルソーじゃなくて、もっと写実的な絵だったら、俺は諦めてたかもしれないですね。

そのルソーの絵というのが1910年作の「牧場」というタイトルの絵だったんですけど、もうむちゃくちゃ下手な絵で、「これでプロか？」みたいに思って。セザンヌの絵もあったんだけど、やたら手が長くて、「これって形が狂ってるんじゃないの？」とか思って。まあ御多分に洩れず、その後ご両人の偉大さは後々色々知るんですけどね。まあ中1の身として正直そう思ったわけです。なにはともあれそれをきっかけに、見よう見まねで油絵を描きだしたんですよ。別に絵画教室に通いだしたわけじゃなくサッカーの練習後に本屋に寄って画集を見て気に入った絵を覚えて、家に帰って、記憶をもとにその絵を描いてたんです。それで、さっき熊本の古本屋でファブリの画集をみかけて、「あ、これだった」と思って。当時、一冊300円だったけれども、今100円で売ってるんですよ。あれが最初の教科書だったのかなと思って。それで、みかんとかりんごとか並べて、静物画とか風景画を全くの自己流で描いたんですけど、段々飽きてくるんですよ。りんご描いててもなあとか、静物画とか興奮しなくなってきた。

ちょうどその頃8歳年上の兄貴が大学生でテレビ局のバイトとか始めだして、テレビ局のライブラリーから洋書の画集とか、洋盤のレコードをガンガン借りてくるようになったんです。兄貴がいない時に部屋に入ってそれを眺めてたりしたら、そこに、衝撃のポップ・アートがあったりしたんですけど、ワケわかんなかったんです、最初はね。ウォーホルのプレスリーのシルクスクリンが載ってるんだけど、「これ描いてないじゃん、刷ってるだけで、これでいいの？」みたいな。そんなの思春期で見たら、調子に乗りますよね。ウォーホルっていうのは、すっとぼけた人物で「この絵はどういう意味があるんですか」といった類の質問に、「これは助手が作ってるからよくわからない」とか平気で答えちゃうんだよね。それがカッコいいみたいな、へー絵描きが絵描かないんだ！みたいな衝撃があったんです。だからそれも、もしそれも刷った絵じゃなかったら俺には無理かなって思ったかもしれないですけどね。だいたい、10代の頃ってそういうのを知っちゃうと何ていうかな、自意識過剰っていうか、どんどん頭でっかちになってくるところもあって、自分が生きてる、まさに今世界で同時多発的に起きてる絵画事情や状況を知りたくなるんですよ。学校で教えられてる事と、現実とが全然違うじゃねえかと思って。その頃から、いわゆるコンテンポラリーアートみたいなものを、積極的に見るようになりました。当時は、本とかですけどね。ほぼ独学で、自分の感覚に引っかかるものをどんどん調べていくっていうかね。だから、自分の基本的な美術の知識って、大体高校3年あたりで止まっているんですよ。

そんな日常と並行して受験期に突入していくわけです。だからどんどん自分の中で矛盾することが増えていくわけです。自分は、描かなくて刷っちゃうような作品がカッコいいなと思ってののに、予備校に行くと石膏デッサンでブルータス描きなさいみたいな。予備校に行くと、5浪6浪って「それが名前か？」みたいなオヤジのような奴がゴロゴロいて、その連中は朝9時から石膏デッサンやってる。高校生の技術じゃ敵うわけがない現実を目の当たりにする。一方で、そもそも絵描きや芸術家を目指すのに、親からの資金で何年も浪人してまで美大を目指すっていう根性がそもそも芸術家じゃねえだろっていった気持ち

も込み上げてました。自分としては、アーティストっていうのはやっぱりまずできるだけ人と違う経験をして、いろんな思いをするっていうのが基本じゃないかなと思うところも強くあり、浪人なんかするより、例えばトラックの運転手として働くほうがまっとうじゃねえかとか思っていて、受験は1回だけと決めていました。当時中学高校の美術教師の評判はすこぶる悪かったと思います。「もうコイツぶち殺したるか」みたいに思われてて。そうなる余計こっちは燃えて「殺してみろ、この野郎」みたいなね（笑）。今となっては笑い話ですけど、そういう風になっちゃうわけですよ。だから、余計に先生は頭に来る。でも、30年くらい経ってみると、その先生それだけそりが合わなくて良かったとも思うんです。すごく反抗的で絶対先生には従わない。先生にけなされると「ありがとう」、褒められると「馬鹿にされた」みたいな意識が非常に強くて。だから美大時代も油絵科に入ったら「絶対油絵の具は使わねえ」みたいな。でも、それだと単位はとれない。だけど、それが自分の起爆剤になるっていうか、そういう気持ちが強かったですね。



「大竹伸朗 ビル景 1978-2019」展 展示風景
「倫敦／香港 一九八九」シリーズ

で、何の話でしたっけ。香港の話をしてたんだよね。「ビル景」っていうのは、香港のビルに衝撃を受けて描きだしたんですけど、その後の80年代中頃、30歳前後の時に、「東京」シリーズっていう、小さい絵を描いていたんです。結局、「ビル景」っていう作品は、実

景がほぼ一点もなく、全部記憶から描いてる絵なんです。今回、僕が23から63歳くらいまでの絵を、507点展示してありますが、もちろんビルだけ描いてきた訳ではないけれども、壁に単純に絵を掛けていく展覧会っていうのはこれまでやった事がない、初めての事なんです。僕の中ではファブリの画集ではないけれども、全ては絵から始まったっていうかね。なかなか絵だけで、この規模で展示する機会が訪れなかったので、今回は熊本の展覧会が実現したのは、自分にとっても、ものすごくありがたいです。単純に、絵が壁に淡々と掛かっている展覧会を、ずーっとやりたかったっていうか。だから今回はそれがすごく嬉しいですけどね。

これまで「ジャパノラマ」とか「網膜」シリーズとか、様々な連作の時期はありましたがその隙間に時折顔を出すのが「ビル」でした。その度ごとに自分の中で矛盾が生じるわけです。紆余曲折を経て気持ちではこの方向でいこうと思ってるのに、またビルが出てくるといったことが起きる。その度ごとに自分の中で基準にしていたことが「気持ちに正直に従う」といったことで。頭でどんなに矛盾を感じても「描きたい」かどうか、そのときの気持ちに従うことを繰り返していきました。そうして描きためていたのが、今回のビルの塊になった。さっきも言ったけれども、そのラインの存在に、40歳過ぎまで気付いてなくて、13年前に東京都現代美術館で、「全景」展をした時に、ビルコーナーみたいなのを作っただけで、そこに至るまでの作品が全然未調査だった。それで、何となく自発的にそのビルの絵が出てくる度に、仕事場の一角に「ビル景コーナー」的な場所を作って、その箱に放り込むなり、写真が出てきたらそこに集めるっていうような、とにかく一ヶ所に集めるっていうことを2、3年やってた。まだ完全じゃなかったんですけど、熊本から話をいただいて、サイズを測ったり、素材を調べたり、並行して画集も作ってたから、具体的に進んでたっていうかね。作業としては、初期は混乱を極めていて、時系列に並び替えるっていう作業がものすごいある。かたや、終わらないビル探してみたいなのを、永遠やってた。だから、こっから先、「ビルシリーズ」に関連する作品が一点も出ないってことはないと思うんですよ、おそらく。でも、もう時間切れで、今回はここまで、やれるところまでやった、っていうのが今回の展覧会と画集です。

結局は、78年に描いたロンドンのビルの絵が出てきて、それがスタートになってるんですよ。そのロンドンの絵も、実際の風景を見て描いたわけじゃなくて、ロンドンから帰ってきてから描いた印象の絵なんです。さっき言ったように、最初はアメリカに行きたいと思って旅行代理店に行ったらお金が足りず、できるだけ長く居たいんだったら、ロンドンの方がいいんじゃないのってことで。結構適当なんですよ。けどまあ、ロンドンに行ったけれども、当然何も起きないわけで。この先どうしようか考えつつ極力手持ち資金を使わず粛々悶々とスケッチやスナップ撮影をしていました。唯一の収穫は、最初に行ったロンドンで、今に続くスクラップブックがスタートしたと思うんですけど。その頃に、イギリスの王立美術学校の卒業展があって、誰も知り合いはいないんだけど見に行って、そこで友達が出来るんです。2回目に行った80年は、東京にいても何も仕事がなく、友達に会いに行ったみたいなところですよ。その頃は、アルバイトで『自然と盆栽』って

雑誌で、盆栽のカットを描いていました。定期的は大宮の盆栽村に通って、おじいさんに話を聞いて描く。写真だと、どうしてもディテールがわからないので、理科の教科書にあるような図を写實的に描くわけです。それは結構おもしろかったんです。

それで…ロンドンの話か。当時、イギリスに WIRE っていうバンドがありました。76 年に結成して、79 年にアルバム 3 枚で解散するんですけども。パンクロックの頃です。その WIRE の音は、パンクロックとも違う、今聴いても全然古くない音で、そのギタリストとベーシストが、解散後に DOME っていうバンドを結成するんです。中心街のレスター・スクエアに当時あったノートルダム・ホールっていうスペースで、ドイツのバンド DAF の前座でやる初パフォーマンスに声をかけてくれたんですよ。それで、そのときはもう生まれて初めて自分の居場所を見つけたっていうか、なんか初めて世の中に立ち位置ができたみたいな喜びがありました。声をかけられたっていうのが、すごく強烈に残ってるという年ですね。色々お話ししたいことはあるんですけど、展覧会に則して言えば、分量的には全体の 5 分の 1 が東京で描いて、あとの 5 分の 4 は全部宇和島で描いているんです。宇和島にはビル群があるわけじゃないんですが、なぜそのビルが続いたかというのは、今から考えると、やっぱりその宇和島に行ったことに、無意識的に強い影響を受けてたんじゃないかって思います。さっきの話じゃないけど、ずっと自分の居場所がないって感覚があって、東京が故郷っていう気もしないし、宇和島が故郷っていう感じでもない。そういう変な感覚が途切れることなく続いているんですよ。だから結局は、自分の内側の世界をずっとエンドレスに追いつけてるっていうか、そこで気持ちのバランスをとってるような感じだと思うんです。だから僕は、ロンドンとか香港に行ってた 24、5 歳の頃は、技術も含め分からないことばかりだと思っていましたがじゃあ 60 過ぎたら何か分かったのかっていうと、分からないことばかり増えていっただけで何一つ変わっていないようにも感じるし。文芸誌の『新潮』に毎月エッセイを書かせてもらっているんですが、これがちょうど 11 月に出た、連載をまとめたエッセイ集です。去年の春ぐらまでの 5 年間、「ビル景」の準備をしながら日々考えてたことは、もうここに全部書き尽くしてる。こういう日常の中で、ビルの絵を集めてたっていうのは、よくわかる内容だとは思いますが。

それで、この 2、3 年は美術より、音楽の本を読むほうが多くて、去年なんか東京にシャワー付きの簡単な倉庫を作って、その一室にレコードを聴く部屋を作ったんです。築 50 数年、前の東京オリンピックの前年に建ったボロ屋の実家が老朽化していて、兄貴に「お前いい加減になんとかしろ」って言われて、それで作って。で、またそこでレコードを聴くようになって。最近はだから、中古レコード屋に行くのが一番楽しい。それで結局、振り返れば、やっぱり 10 代の頃から、自分が欲しい物は、木工用ボンドとレコードしかない、っていうのは変わらんいですよね。その二つさえあれば生きて行けるっていうか。木工用ボンドがあればなんか作れるし、あとはレコードがあればもういいかな、みたいなね。もうそれぐらいなんですよ、今欲しい物っていうのは。だから、高校のときからあん

まりライフスタイルも生活のベースも変わんないままきちゃってる。まあそれで、なんですかね、ここの会場に、絵を掛けた順番を頭に思い浮かべてるんだけど、紛失してしまったビルの絵っていうのが、実は他にあるんですよ。フィルムがあったんで、画集には載ってるんですけど、現物がない。例えば、「ソーホー、ニューヨーク」っていうシリーズは、あと同じサイズが2点あったんですけど、それはもうどっか行っちゃいましたね。その次のあたりは、大体80年代で、30歳前後に東京で描いてた絵ですね。で、次の部屋に入ってからビルの絵は、もう全部宇和島に移ってから描いてた絵ですけどね。大体、ほぼ時系列に並んでいるんだけど、時々全然関係ないような絵が出てくる。



「大竹伸朗 ビル景 1978-2019」展 展示風景
1980年代のビル景

いつもそうで抽象的な絵を集中的に描いてると、突然木炭画で超写実的な絵を描きたくなるっていうかね。今や、美術っていうのは、「絵を描く」というと、まず「コンセプトを述べろ」とか、「なんで君はこういう絵を描くのか説明しろ」といった前提が当たり前のように思いますが、僕自身はそういった流れに長らく疑問を持っていました。結局人それぞれのタイプだと思いますね。「コンセプトがないと僕は絵描けないんだよね」という知り合いも確かにいました。それは人それぞれだからいいと思いますが押し付けるのは良くないと思います。描きたい絵を言葉で十分に説明できるのならそもそも絵

に描く必要があるのかどうか。どうしても言葉で説明できない事柄とその絵を見た瞬間の心の動きの関係は自分にとっては長らくとても大事なこととしてあり続けています。だから、絵を描く日常についてのエッセイを書く際に「絵を描きたいと思う気持ち」とは具体的にどういうことなのかっていうのが、なかなか言葉に落としづらいんですよ。それを言おうとすると、文脈とかコンセプトとかっていう自分自身にとっては要注意な単語を探っていくざるを得ないというか。衝動とか直感というのは、すごく曖昧な事柄として捉えられることが多いけど、自分にとってはそのほうが近いんですよ。だから、その絵を描きたくなる気持ち、瞬間というのを言葉に落とし込むときに、「心情」とか「心」っていう言葉を使って書いたんだけど、まあ、どうにもなんかちょっと甘ったるい感じで、ピッタリとこない。そういうのが続いているんですよ。

今回、偶然、熊本に設置に来るときに、本屋に寄ったら、岡潔さんっていう数学者の本を偶然見つけて。僕は全く数学とかは門外漢ですが、この岡潔さんっていう人の本に出会ったのは、20年ぐらい前だったのかな。この人はやっぱもうスゴイ！と。岡さんは天才数学者として、ちょっと変わった人っていう印象もあるようですが、要するに70代後半で亡くなるまでに、世界的な数学史に残る10の重要な発見をした人なんですよ。その人がまさに「絵を描く気持ち」っていうのを、素人にも分かりやすいように書いてまして。岡さんは、西洋の個人主義とか唯物論とかっていうのを全く否定していて、仏教や哲学について学んで、全ての時間を数学の研究に費やしたいというので、人付き合いもないような人生を送った方です。学生に教えるようになって、「人生に生きがいを感じない」っていうようなレポートがあまりに多いので、じゃあ数学の本じゃなくて、晩年に近づくにつれて日常哲学的なエッセイを多く書くようになります。その中で繰り返し言ってるのは、西洋では、例えば「心」は、脳なりその体の中にある「物」なんだ、ということからすべての考えが始まると。けれども、岡さんにとっては、物や物質を研究していても、世の中がわかったことにならないということが、厳然としてある。

これは俺の勝手な解釈で合ってるかどうかわかりませんが、要するに、魚が水の中に生きるように、人間っていうのは、心の中に生きてる、っていうわけですよ。禅問答のようでわかりにくいことなんだけど。例えば人間の肉体は、医学的には「この臓器はこう動いてる」と言えるけれども、結局その人間の意思として自分の身体にできることは、食べることと排泄で、それはある程度コントロールできるけれど、物が口の中に入ってから出てくるまでのことは、何一つわからないんですよ。それを、岡さんは一本の木と葉っぱに例えておっしゃっていますが、その文章を読んでいるときに、その「絵を描く気持ち」というのが、すごく腑に落ちた。だからよく「なんで絵を描くんですか」と言われるんだけど、岡さんの話と何処か関係があるように思った点は「物には知力がある」っていった下りでした。そう考えざるを得ないっていうわけです。それはどういうことかっていうと、例えば、小川がせせらぎになるには、「水が低いほうに流れていく、その最短のベストな方法を水が選んでる」っていうわけですよ。だから、「その結果、せせらぎっていうのが生まれてるから、

その水に知力、考える力があるっていうふうを考えるのが、一番納得がいく」っていうのね。そういう考えは、西洋の考え方には全くないと思います。そういったことと自分の絵とは何か強く関係している。

会場の壁にも文章がありますが、僕の場合、「ボロボロの物を見るとなんか衝動が浮かぶ」。例えばボロボロの壁と自分っていうのは、なんていうのかな、別の物じゃないんですよ。だから出会って自分が反応する壁の中に、もうすでに自分の気持ちがあるっていうふうを考えるのが、一番納得がいくんですよ。だから絵を描きたくなる瞬間っていうのは、なんかその自分が目撃した物の中に、自分の気持ちを見るんだと思うんですよ。だから自分の気持ちが同期するっていうか、そういうようなことなんじゃないかなっていうのが、その岡さんの本を読んで感じてることなんですけど。例えば「どういう物が好きなんですか」ってことじゃないんですよ。だから例えば、新品のプラスチックの製品に反応することもあれば、ボロボロの壁に反応することもあって、いわゆる、そこは自分の気持ちと切り離して考える人にとっては、一貫性がないって言われちゃうんですよ。だけど、自分の気持ちの中ではそのピカピカのプラスチックの表面も、ボロボロの壁も同じで。それを説明するのはなかなか難しいんです。もう気持ちが反応するとしか言えないっていうか、その反応が続く限り絵が出てくる。だから僕は今までスランプとか感じたことはないんです。絵が描けなくなるとか、もうそんなのは基本的に贅沢な悩みだと思うんですよ。絵が描けなくなったら、絵が描けない気持ちで絵が描けるじゃないですか。岡潔さんは松尾芭蕉が好きなんです。また熊本に縁のある夏目漱石もすごい好きで、「漱石命」みたいな人なんです。数式と俳句っていうのはものすごい通じるものがあるって、松尾芭蕉のことを僕は良く知らないんですけど自分なりに「宇宙」を感じます。なんか音が鳴るっていうか。そういう音が鳴る情景を、17文字で表現する。岡さんの芭蕉の句の解説は、すごくおもしろくて、「この句っていうのはこういう情景だ」みたいなことをすごく事細かに的確に描写するっていうか、やっぱり繋がるもんがあるんだろうなと思って。

あと、普段あんまり絵のことばかり考えてるわけじゃなくて、音楽とか聴いたりしていますけど、去年はなんといっても一番衝撃だったのは、スーパーボランティアの尾島春夫さんなんです。その直前あたりは気持ちの悪い腑に落ちない事件が多かったじゃないですか。大人が嘘つきまくるみたいな。もう本当に日本も腐りきったな、そんなことを思うことの多い日々の連続で、すごい気分的に晴れなくて。アメフトのコーチみたいなオヤジ連中がみんな俺の同年代なんです。だから余計に気が滅入って。同年代がこんなにも腐ってしまったんだな、みたいな思いとか、情けなさ不甲斐なさが募ってた時期で、そこに颯爽と登場したのが尾島さんだった。あの子供確保直後の映像見てて、尾島さんが子供を抱えて、周りを警察官がなんか困ってる感じの光景がすごい異様に見えたんですよ。久しくこういう光景見たことがなかった。みんなで3、4日探してたのを、尾島さんは、30分で探しちゃった。あの人一人ですべて持って行っちゃったみたいな世界で。あの人を持っている人だと思ったのは、山に入る前に偶然、捜索中の子供のおじいちゃんと立ち話して、「私

があなたの孫を絶対探すから、探したらあんたに直接渡すから」みたいに約束してんのね。で、結局尾島さんが発見後に、「おじいちゃんと約束したから、あんたらにこの子供は渡せない」と捜索隊連に頑なに引き渡さないんですよ、いやぁ素晴らしい、しびれました。「約束」なんて言葉を久しぶりに公の場で聞いたっていうかね。改めていい響きだなぁなんてね。真っ当なんだよね。「法律だとかそんなことじゃない。約束を守るんだ」って真っ当なことを言って、尾島さんが「小さな命が助かって良かった」って言ったときに、こう目頭を押さえて泣いた瞬間に、こっちも泣けてきちゃってね、涙がもうボロボロ止まんない状態になっちゃったのね。この涙って一体なんなんだろうっていうか、尾島さんの中継見ても、泣けて泣けてしょうがなかったんですよ。当時の自分の心情と真逆のものが、偶然見えたから。まだなんかこう「日本にもこんな立派なジジイが生きてるんだ、やっぱすごいな」と思ったのね。そこでまた希望が生まれて、「この尾島さん一人で、まだ絵バシバシ描けるぞ」って、そういう感じになったわけですよ。

それでやっぱ、世の中おもしろいのは、その直前に出てきたアマチュアボクシング協会の人。なんつったっけ。…山根さん。俺はやっぱああいう人を無条件に好きになっちゃうんですよ。もうむちゃくちゃなんだけど筋通ってるっていうか、今の政治家より全然カッコいい。この人は間違ってるけど正しいみたいな。その山根会長の直後に尾島さんの登場だったんですよ。それで、実は興味深かったのは、山根会長は尾島さんと生年月日が一緒だって言うわけ。同じ年の同じ月の同日に生まれてんですよ。同じ日に産まれて、同じ日数生きて、同じ年に同じ時期に注目されてというのが、なんかこう惑星直列みたいな衝撃があったんですよ。山根会長と尾島さんが、時期をずらすことなく登場っていうのが、運命というか、こういうことってあるんだなって何か無言の感慨深さにスッと包まれたというかね。だからやっぱり本当は、あんまりそういうこと言うと良くないのかもしれないけど、やっぱり尾島さんは日々のどこかの地点で悟ったんだと思うんですよ。「6万いくらの年金で、施しは受けません」みたいな。「風呂入っていけ」って、「風呂入らない。敷居を跨がないのが礼儀だし」雨降ってきて、傘をおじいちゃんに渡されたら、「傘いりません。雨に濡れて行くのが好きですから」とか、その全てがカッコいいわけよ、一言一言がね。やっぱ説得力がもう並の人間とは違う。79でね、中学生に講演した翌日、「大分まで歩いて帰るから」ってじいさんいないですよ。本当にあの人カッコいいなと思うんだよね。だから尾畑さんのような人を目の当たりにすると、昨今の健康ブームとか平均寿命といった言葉がすごく薄っぺらく聞こえてきてね。要するに体鍛えて健康な身体作って「で、あんた何したいの？」って思うんですよ。尾島さんは「健康な体で人のために働きたい」ってこれがやっぱ素晴らしいなと思うんですよ。健康で平均寿命まで生きることはもちろん素晴らしいことなんですけど、それでやりたいことが、温泉グルメツアーでピースみたいなものって、なんか悲しい。まぁ人それぞれの幸福感ですけど何かとっても空しさを感じる。そんなことでは人の心っていうのは満足しないようにできてんじゃないかなと思うんですよ。結局答えには至らないかもしれないけど見つからないかもしれないけども、それを探していくっていう紆余曲折の道筋が、やっぱ一番おもしろいんじゃないか、興奮するんじゃないか

ないか？自分自身は、絵を描いてなにかがわかることなんて最初からないと思ってるし、それで充分だと思っているんですよ。

あと 30 代の頃の話を少し。30 代の頃は何かとトラブル続きで、もうどうしようか、これから先みたいない時期でした。20 代後半から 30 代前半の頃は、展覧会もできなかつたし、さっき言ったように、反抗的だった罰がついにまとめてやって来たかみたいに思っていました。その頃に心の糧、気持ちの支えになっていたのは、芸術家じゃないんですよ。フェルディナン・シュヴァルっていう、19 世紀後半の人ですけど、フランスで「シュヴァルの理想宮」っていうのを作った人がいるんです。田舎の郵便配達人で、妄想癖が異常に強い人で、当時はまだ山の中歩いて郵便配るような時代でした。43 歳のときに、配達中の山道で石につまずいて転ぶわけですよ。で、つまずいた石を掘り返すと、すごく不思議な形をしてて、そのつまずいた石に魅了されるんです。そのエリアっていうのは昔海の底で、奇石の宝庫だったエリアで。その日をきっかけに仕事に奇妙な形の石を集めだすんですよ。それから、鞆の中に石をいれて、運び始め、そのうち集めるのを越えて、宮殿みたいなのを、その後 33 年間かけて造るんです。村人からも変人奇人扱いで、だけどその人は淡々と一人でその石を集めて宮殿を作っちゃうんですけど、巨大なんですよ。幅 33 メーター、高さ 10 メーターぐらい。その当時、理想宮のあるオートリーブっていう村まで見に行っただけですが、やっぱり実際見ると、とんでもないですね。そのスケール感が。これを一人の男が、40 代半ばから 70 代中盤ぐらいに完成させると、今度は自分の墓を造りだすんです。結局墓を 8 年ぐらいかけて造り終えて半年後ぐらいに死ぬんですけど、一生無名ですよ。

一生奇人変人扱いで終わった人や、30 歳前後の僕のヒーローっていうと、白鳥由栄っていう、網走刑務所を脱獄した脱獄犯がいます。80 年代半ばに出された、吉村昭さんの『破獄』（新潮文庫）って小説があります。その小説が発表された当時はまだ諸々の事情から実名で書けず、佐久間清太郎として出てきますけど。戦前に結局 3 人ぐらい殺しちゃ悪い人なんですけど、関節外してどこでも出ちゃう。そういう天才脱獄犯です。その当時って捕まったら拷問だし、今のように人権がそんなにある頃じゃないから、半殺しにされるのを覚悟してそれでも、やっぱり逃げる覚悟っていうかね。逃げるためには脱獄を重ねれば重ねるほど、向こうもいろいろガードが固くなるわけで、やっぱり、究極にオリジナルな方法を考えないと破獄は難しい。どんどんハードルは上がるにもかかわらず、それを繰り返した精神というのはね、自分の中にすごく、核としてありましたよね。会場前半にはそんなことを考えながら描いてた絵が結構並んでいます。

あとなんですかね。絵の話あんまりないんですよ。なんか描いて終わっちゃうっていうか、スクラップブックも絵も、描くと見ないですからね、まず。本当にだからこういう展覧会の機会を与えていただくと、照明の中で自分の絵を初めて見るみたいな、じっくり。だけどなんか、自分が気付いてないこととかが結構あって、この頃のこの部分は面白いなとか思うところがありましたね。この 30 号のペインティングは、砂とか大理石とかを油絵の具に混ぜて描いてた頃です。今思い出したけどなんで砂とかを入れたのかっていうのは、きっかけは「レコードジャケット」の絵に感激したことなんです。アメリカのなんと

かいうジャズロック的な音のバンドで、音ではなくジャケットに衝撃を受けたんです。結構そういうのが多いんです。展示中の「地図」シリーズっていう、赤とかダークブラウンの上に白い線でグリッドを描いた絵は、辞書を見てたとき偶然目に止まった「国境線」なんですよ、確か。アフリカの国境線って地図で見るとものすごい直線じゃないですか。だから、そのエリアの国境線の図が5センチくらいのモノクロの図案が入ってて、それ見たときに、絵描きたくなっただけなんです。だから、結構「ビル景」っていうのは、ビルっていうテーマが一つにまとまっていかないときっていうのは、地図とか、結構その建物周辺をウロウロしてます。「まあこれ地図じゃないな」みたいなのところに行くんですけど、でも自分の中では、やっぱりあとから見ると、同じビルのラインにあるっていうか。そういうようなことをすごく思いました。



「大竹伸朗 ビル景 1978-2019」展 展示風景
砂や大理石を油絵の具に混ぜて描いていた Bldg. シリーズ



「大竹伸朗 ビル景 1978-2019」展 展示風景
ビルの絵が入った 94 年後半のスクラップブック

スクラップブックに関して一つだけその中にビルの絵が入り込んでるっていうのがギリギリになってわかってそのページだけ本に収録しました。それは 1994 年後半のスクラップブックなのですが、93 年にモロッコに初めて行って、その翌年にイスタンブールに行ったんでよく覚えています。モロッコは『カスバの男』って本を作りに行き、結構モロッコにはやられたんです。だから、もう一回行きたいところというのは他にはあんまりないんですけど、モロッコのタンジールはもう一回行ってみたいと思います。タンジールは、50 年代にポール・ボウルズっていう文学者が住んでたり、結構おもしろい歴史があって、ブライオン・ガイシンっていうイギリス人のアーティストがそこにハマって、繋がりがあるロックミュージシャンや作家がその地を訪れていました。ローリング・ストーンズを作ったブライアン・ジョーンズも録音機担いで 60 年代後半に、フィールドレコーディングをしにジャジュカ村っていうところに行って、音楽を録音したのを、そのまんまソロアルバムで出してます。それもすごい不思議なアルバムで。ジミ・ヘンドリックスも行ったとか、あとジャン・ジュネのお墓があったりとかして以前からすごく興味のある場所でした。

タンジールにはスペインの港からフェリーを使って入りました。スペインの南部にマラ

ガっていう町があって、そこはピカソが生まれた町でね。そのマラガを見てから、バスで2、3時間行ったところに、アルヘシラスっていう港があって、そこからタンジール行きのフェリーが出てた。地元の人とかが乗り込むような庶民的なフェリーで、ジブラルタル海峡を通過して行くんだけど、そこに奇怪な形の岩山で有名なジブラルタル島っていうイギリスの海外領土があるんですよ。

なんで「ジブラルタル」っていうのが記憶に残ってるかっていうと、あのジョンとヨーコが結婚式を挙げたこととして有名な場所だったからです。二人が結婚するとき手続き的に楽なイギリス領のジブラルタル島を推薦され急遽、短時間滞在でジブラルタル島に行ったっていうエピソードが中学以来ずっと頭にあって。当時、ジョンとヨーコの結婚写真の背景に写っていた岩山のあるその島はどんなところなんだろうと強い好奇心がありました。フェリーからその岩山を仰ぎ見上げながらジブラルタル島の脇を通過してタンジールの港に入ったんだけど、いきなりスーツケースを引っ張り合うみたいな、感じでね。僕はインドに行ったことがないんですけど、インドってこんなところだろうなというか、まあ一言で言うと、聖と俗が隣同士に鎮座するっていうか、悟りの境地も煩惱もちょこんと隣り合って並んでいるようなイメージがありました。そこはヨーロッパの金持ちとか、アーティストとかがたむろする避暑地として有名な場所であるにもかかわらずインドが浮かぶような不思議なインパクトがありました。タンジール以外には、マラケシュとフェズにも行ったんだけどタンジールは他と全く違いました。北アフリカの町の中にヨーロッパやアジアが入り混じるハイブリッドな不思議な空気があった。だからモロッコを心底好きな人は、やっぱりタンジールは西洋文化に毒されてるっていうようなことになるんだろうけど自分にはそのほうがなんかこう、ピタッときたっていうかね。

それと、マラケシュっていうとレッド・ツェッペリンだし、CSN&Yって若い人には伝わりにくいとは思いますが、70年代クロスビー・スティルス・ナッツ&ヤングというアメリカのバンドがあって、ニール・ヤングが入る前のアルバムの中で、『Marrakesh Express』っていうヒット曲がありました。そんな風に当時何かと自分の中でロック音楽とマラケシュというのは繋がってて。マラケシュにはジャマ・エル・フナ広場っていう有名な観光地があります。そこは、昔死刑執行場所だった広場なんだけど、今は大道芸人が、世界中からたむろするような場所になってるって当時耳にして。僕が行ったのはもう25年前だから当時の現状も不明だったんですけどとりあえず行ってみよう。そこはおもしろかったですよね。その熱が冷めなくて、その翌年は『芸術新潮』の特集号でイスタンブールに行かせてくれた。イスタンブールも最近テロが多いですけど、9.11以降ですよ。外国はよく行ってたんだけど、本当に出入国も楽しかったんですよ。だけど、あれ以降は空港の雰囲気もどんどんと陰険になっていって。だから外国に行く時の入国審査とかすごく嫌になりました。もちろん、せざるを得ないっていうのはわかるんだけど、なんかこう、かつてはもっと外国旅行にも自由な感じがあったなとどうしても思ってしまう。

再び話は飛びますが、最近もおもしろかったのは、ゴミ屋敷。テレビに、ゴミ屋敷が出

るとなんかつい見ちゃうんだけど。直島の「家プロジェクト」で銭湯とか「はいしゃ」とかいろいろ作らせていただけてますが、例えば、世田谷区から「家プロジェクト」の制作依頼を頂いたら、俺、ほぼあの「ゴミ屋敷」のような作品になると思うんですよ。確かに大迷惑じゃないですか。どう考えたって駄目なんですよ。匂いは出るし、小学生はつまずくし、危ないとか、もうおっしやる通り。おっしやる通りだけどうなっちゃうんですよ、っていうのが、やっぱりなんというか作家的な説得力を覚えてしまうといった。ゴミ屋敷のオヤジはアーティストだとは思わないし、世の中のルールを破ってるっていうのもわかるんだけど、んだけど、なんていうかな、あの人はゴミを見ると極少数派としての心が反応するんだと思うんだよね。だからあの人は、生きてる間に自分にとっては正しいことをやってる。心の赴くまま、動くままに生活してるからあんなっちゃうわけで、それがやっぱりあの人の「心」が反応してるし、「心」の中に住んでるんですよ。

岡潔さんの本で分かりやすく面白かったのは、生まれたばかりの何ヶ月かの赤ん坊って笑うじゃないですか。赤ん坊は、自分が幸福だ、とは思ってないんですよ。でも、その笑っている赤ん坊を見た人っていうのも大抵笑うじゃないですか。生まれたばかりの赤ん坊が笑ってるところを見て、怒る奴いないですよ。だからそれは笑う赤ん坊の中に自分自身の「心」があるってことなんですよ。俺もあんまり偉そうなことは言えないし、岡さんの話も到底理解ができないんですけど、多分、物重視の世界っていうのはもう、限界なんですよ。だから、なんかこう未だに自分が欲しいのがレコードと木工用ボンドというのはなんか結構健全なんじゃないかっていうかね。そんなこと思ってます。

最近、すごく笑ったことがあるんです。他のアーティストの話をするのもなんなんですけど、ちょうど水戸芸術館でやってた、イギリスのアーティストのデヴィッド・シュリグリーの展覧会を娘に教えられて行ってみたんですよ。絵がイケてるなと思って行ったら、実際、予想を超えておもしろかったんです。ユーモアがあるコンセプチュアル。「オリジナル」っていう作品のシリーズだと、版画なんだけど一点しか刷ってない。それは版画と絵画の矛盾をついてて、版画は複数あるべきなのに、一枚刷りゃオリジナルだろみたいなところが笑いと共にあるわけです。そういった世の中の理屈っていうか意味に、根底から疑問を投げかけるというか。陶器で美的観点からかけ離れた黒い長靴を作ったり。あと、気に入ったのは《ヘッドレスドラマー》とあって、頭がないドラマーが永遠ロックビートを刻んでるみたいなアニメーションもショックでした。あと、《ロウンドリー》ってコインランドリーみたいなタイトルだったと思うんだけど、男が白い馬に乗ってるんだけど、泥が跳ねて、だんだん体に点々が増えていく。そしたら、馬を降りて、デカイコインランドリーの中に馬突っ込んだっちゃうんですよ。コインランドリーの中では、馬がグルグル回ってて、乗ってる奴は側で新聞読んでるみたいな。そうすると、店の親父がチラチラ横目で見て、「おいそこのお前、馬を入れるの禁止だろ」とか言って怒るんだよね。そういうのもすごいイギリスっぽいジョークっていうか。つくづく何事においてもユーモアやお笑いは大事だと思いました。

それで、本題はこっからで。その水戸美術館のカタログ読んでたら、シュリグリーの初期作品で、剥製のねずみや猫が、「I am dead」っていうプラカード持って立ってるっていうシリーズがあって。スイスのバーゼルっていうところで毎年アートフェアがありますよね。シュリグリーは彼の専属画廊から、バーゼル用に新作の制作依頼を受けたと。それで、シュリグリーは新作の《死んだねずみ》を出した。ひっくり返った死んだねずみの剥製を作って、バーゼルに送ったわけです。一回読んだうろ覚えで話しているんで、内容の正確性は定かではありませんが、彼のコレクターがその新作をすぐ買うことになったらしい。それで担当者が、その作品を机の上に置いて帰ったら、清掃員が死んだねずみを捨てちゃったと。しかも、気を利かせて、黙って捨てたんですよ。展覧会にとって清掃員の方々は結構手強いんですよ、ある意味行動があまりに本質ついているというかアートを超えているというか。

それで翌日その「死んだネズミ紛失という超緊急事態」対応に関係者は血眼になってゴミ収集箱を必死に漁る羽目になったんだけど結局見つからなかった。笑ったのは作家自身が「探していたのとは別の、死んだネズミが見つかったそうです」ってシレっと言ってる点で。この話は、アートの今のシステムをピンポイントで言い当ててるって感じたんですよ。落語のオチみたいでおかしいんだよね。だから、本当にこいつすつとぼけた奴だなと思って。久々に痛快に腹抱えて笑いました。人の宣伝をしてもしょうがないんだけど、イケてるんですよ。頭のないダチョウの作品もカッコよくて、それをブリティッシュ・カウンシルって政府の文化機関が買う。やっぱり民度が違うし、日本の政治家は絶対頭のないダチョウは買わないですからね。首相官邸に頭のないダチョウが並ぶと、日本も可能性が出てくるけど、大抵富士山の絵とかね。そのブリティッシュ・カウンシルのシュリグリー担当者のコメントも「頭のないダチョウが世界を飛び回って嬉しい」って、コメントもイケてる。やっぱり日本ってどうしても美術が勉強の一つって感じが強いんじゃないのかな。というのはね、もっと、自分の中では、美術はやっぱりすごい鋭いブラックジョークみたいなもので、バンクシーなんかもそうでしょ？シュレッターの作品も、寸止めじゃなくて一気にいっちゃってとは思ったんだけどね。

あと最近おもしろかったのは、スペインの小さい村でキリストの顔を修復したおばちゃんがいたでしょ？もうあれも痛快な出来事でした。もう、これこそアートだろうと思ったんだけど、怒り心頭だった人もいた。でも、結局人が来て、グッズも売れたし、あれは傑作だったね。おばちゃんの勝ちっていうかね結局。他に、最近のニュースでは俺の世代だと、やっぱりショーケンに、内田裕也さんがいなくなり。イギリスではスコット・ウォーカーっていうミュージシャンが亡くなったんです。小中学生の頃に、ウォーカーブラザーズっていうトリオでアイドル的な人気があったバンドなんですよ。明治チョコレート提供のCMとかに出ている。86年頃に、『クライメイト・オブ・ハンター』ってアルバムが出て、久々にレコード屋で買って聴いたのを憶えていますね。スコット・ウォーカーは、アイドル路線からソロに切り替えてプロのミュージシャンとして、どんどん神格化されていったん

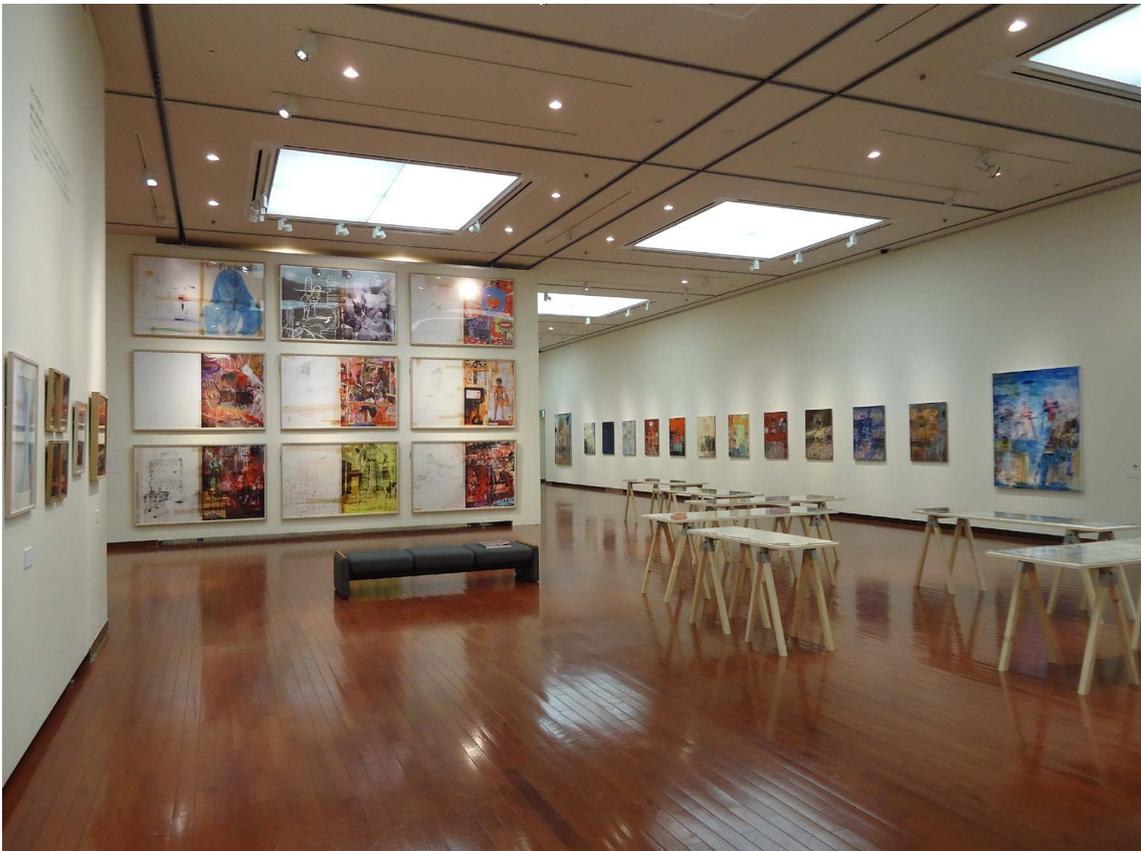
ですよ。日本だとそういうニュースが伝わってないけれども、イギリスでは神様な存在だったのは覚えてますね。3年ぐらい前にね、日本版でも『三十世紀の男』ってタイトルのDVDが出て、それ見るとおもしろいですよ。スタジオに肉の塊運び込んで、打楽器代わりにしたりとか、やるのがなんかすごい変わってるんですよ。いい音録るために、肉屋行くとかね。普通のミュージシャンとは全く違う音作りをした人です。

それと、そういえば俺は学生の頃に内田裕也さんに会ったことがあるんですよ。大学祭の時に、デザイン科の学生が、横尾忠則さんと黒田征太郎さんを2日間に分けて呼ぶっていうレクチャーがあって。担当者が黒田征太郎さんと打ち合わせに行くって言うんで、それでもその瞬間から10分ぐらいで描いた絵を200枚ぐらい袋に突っ込んで六本木行ったわけですよ。俺は部外者だから待ってて、「絵見ていただけますか」って言ったら「いいよ」って。200枚ぐらいボンと渡したら、黒田さん全部見てくれて、見終わった瞬間に「おい、こいつに仕事やれ」とか言って、その場でイラストの仕事をもたらったんですよ。もう衝撃の瞬間で、俺はその雑誌が出るのに、毎回発売日の前から本屋に行って、その雑誌は『野性時代』だったんだけど、幅1センチぐらいに自分の名前が刷られたのね。それ見たときはやっぱりすごい嬉しかったですよ。だから初めて俺の名前を印刷に結びつけてくれた恩人ですね。

黒田さんはまだ今でもやり取りがあります。それで裕也さんの話ですけど、当時の六本木は、今みたいなヒルズができる前だから、ちょっと行きにくい、大人の街みたいな感じで、学生はあんまり行かなかったんだよね。『野性時代』のイラスト担当になった経緯から、毎月通うようになったんですよ、そしたら黒田さんは「飲みに行きますか」といつも敬語で気を使っていただき、いろいろな飲み屋連れて行ってってくれて。赤坂の高い店とか支払額に驚愕といった。学生にとっては、もう衝撃だね。あるとき、飲み屋に誘われて行ったら、待ってたのが内田裕也さんで、もう怖い世界に踏み込んだと思ったね。裕也さんがずっとやってた年末のロックフェスも、横尾さんがデザインして、樹木希林さんがベッドのところになんか飾ってたっていう1回目のポスターも持ってるし、当時は舞台袖に宇崎竜童さんや、原田芳雄さん、安岡力也さん、松田優作さんとか、ああいうコワモテの男たちが立ってるのを目撃したり。黒田さんは、その人たちとすごく仲良かったんです。

それで、ある時、長年通ってる新宿のロックバーのトイレから出てきたら、著名な監督さんに声をかけられたんです。「ちょっと話したいんだよね」とか言って、「黒田さんがさ、君連れて、裕也さんとか挨拶で連れてきたとき、君どうしたか知ってる？」みたいに話で。「酔って全て覚えてません。なんか失礼しましたか？」といったら、「君、全員無視してどっか行っちゃったんだよね」と。酔いもありその監督さんの真意はよくわかりませんでした。なんか生意気だったんだなああと申し訳ないようなこっぴどかしい気持ちになりました。同時に、その話聞いたときに、腑に落ちるものもありました。むちゃくちゃ反抗的だったんですよ。「有名人に挨拶なんかできっかよ」みたいな。そういう若気の至りを越えてね、突っ張ってたっていうか。「アーティストを目指すっていうことは、全員を敵に回すぞ」みたいな覚悟がないと、それは絶対無理だろうっていうのが自分の中にあっただんです

よね。だから「有名人紹介してもらったからって、ヘラヘラ挨拶してんじゃねえ」みたいなコンプレックスの裏返しでそんな思いにまみれていたんでしょね。実際、それとは別の礼儀の話だから、それはいけないことなんだけどね。なんかその話を監督さんから聞いたときに、当時の自分を思い出しました。絵を描くってということってというのは、その画風を確立するとか、スタイルを求めること以前に、どんな状況でも生き延びるみたいな、さっきの脱獄犯の話じゃないけど、まずそこら辺のところ定まらないと、絶対にモノにはならねえなっていうのが、覚悟としてはあったんだろうなって。今回の「ビル景」も黒田さんのところに入りしてた頃からの、いろんな出来事がある中で、ずっと現れ続けたのは、結局ビルの絵だったってことです。だから別にそのビルをテーマにとか、ビルが好きだとかそういうんじゃないんですよ。「なんでビル描くんですか」って言われたら、もう一言で言えば「わかりません」です。わからないけどビル群が頭から消えないんですよっていう。それがなんか今でも続いているっていう話で。まあ、あとはご質問があれば。



「大竹伸朗 ビル景 1978-2019」展 展示風景

質問① ちょっと的外れな質問と思うんですけど、以前、大竹さんの作品の中に、サッカー関連の画像があって。大竹さんの中で、そういうスポーツや、サッカーとかされてたんですか？

大竹 俺は中高とサッカー部でした。1968年メキシコシティーオリンピックが中1の時に、釜本・杉山が活躍した第1次サッカーブームでね。クラマーさんっていうドイツの有名コーチが日本に指導に来たり、岡野俊一郎さんが関わっていたり。アポロ11号が月面着陸した頃ですね。見ていただいたのは、2、3年前にイギリスのマンチェスターであった写真のグループ展に参加した時のものだと思います。俺が中学の時に、「三菱ダイヤモンドサッカー」ってテレビ番組がスタートして、今で言うイギリスのプレミアリーグのサッカーを毎週やってたのね。その当時、マンチェスター・ユナイテッドにいたのが、アイルランド人のジョージ・ベストって人で、アイドルなんです。ちなみに明石家さんまさんのヒーローでもあった選手です。もう圧倒的にカッコよかったんだよね。ビートルズがまだ活動してた頃だから「5人目のビートルズ」みたいに呼ばれてて、むちゃくちゃ女癖が悪くて、でも点は決めるみたいな。当時の中学生には、究極に痺れまくる存在でした。

質問② 最初に熊本から展覧会の話がきて、正直どんなことを考えましたか？

大竹 最初はもうちょっと回顧展的な流れだったんですよ。でも、この10年で作品が結構巨大化していて、天井高は6メートル必要なんだけど、ここは入らない。新作10年分を削られるとちょっと厳しいかな、みたいな状況があって。一方で、「ビル景」っていう絵画の展覧会をやりたいっていうのがずっとあったから、「ビル景だったらいけんじゃないかな」って、それが最初ですよ。すんなり流れは決まったっていうか。

ただ、さっき言ったように、その期間までに準備が終えられるのか、それまでに本ができるのかっていうのが問題でね。今回の設置でも、プランは練っても、最終的に何点展示になるのか、何点省くのかっていうのは、実際この一週間ぐらいの中で置いてみて、決めるみたいな。今回はもう、150点ぐらい掛かんかったんですよ。だからこの画集に収録されているのは、830点なんですけど、実際はどこにあるのか不明なものも多いし。だから、残り200点弱ぐらいは、また巡回先の水戸芸術館で見せて頂けると、って感じですかね。

質問② ありがとうございます。

大竹 こういう機会があると、なんかこう自分の中のビルがまた動き出して、今小さな立体も作っています。大きいやつは、今制作中で、できるかどうかわかんないんですけどね。久々にその音を組み込む作品を作ってますが、なかなかその中の内部がうまくいなくて。1年ぐらい足踏み状態でね。だけど、水戸の巡回展では、新作の立体をなんとか完成させたいと思っています。もう1、2ヶ月すると次回の展示に関しても焦点結んでくると思うんで、もし、機会があれば水戸もあわせて覗いていただけると大変ありがたいです。長時間、御静聴ありがとうございました。

編集：坂本顕子（熊本市現代美術館）